『源氏物語』における葵の上の葬送儀礼

――呪術による境界の設定――

趙　暁燕

1　問題提起

平安期に成立した『源氏物語』には、当時の貴族社会で重視されていた人生儀礼が数多く描かれている。そのうち、葬送儀礼に関する描写が最も多く[1)]、注目すべき現象であると思われる。葬送は、端的に言えば、生者と死者が別れる際に、生者の側によって執行される儀式であり、したがってそこには、生者の死者に対する思いが込められてもいよう。今回、考察の対象とするのは、光源氏の正妻である葵の上の葬送儀礼である。葵の上は、左大臣を父に持ち、母は桐壺帝と同腹の妹にあたる大宮であり、左大臣家にとって大切な一人娘となる。桐壺巻の叙述によれば、東宮（朱雀帝）から入内を望まれながらも、左大臣と桐壺帝との合意によって、皇籍を奪われた光源氏と結婚することになった。そして、結婚九年目の春、葵の上は光源氏の子を懐妊したのだが、出産に際して物の怪に襲われて急逝。物語はその葵の上の死について、招魂儀礼、遺体損壊、葬送儀礼、追悼儀礼といったプロセスを描出してゆく。考察を展開する端緒として、まずは試みに、それらのプロセスの具体相を本文によって確認してみたい。

a 御物の怪のたびたび取り入れたてまつりしを思して、御枕などもさながら二三日見たてまつりたまへど、やうやう変りたまふことどものあれば、限りと思しはつるほど誰も誰もいといみじ。（新編日本古典文学全集・葵巻②46 頁）[2)]

b 人の申すに従ひて、いかめしきことどもを、生きや返りたまふとさまざまに残ることなく、かつ損はれたまふことどものあるを見る見るも尽きせず思しまどへど、かひなくて日ごろになれば、いかがはせむとて鳥辺野に率てたてまつるほど、いみじげなること多かり。（葵巻③47 頁）

c 夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど、いともはかなき御骸骨ばかりを御なごりにて、暁深く帰りたまふ。（葵巻③47～48 頁）

d 殿におはし着きて、つゆまどろまれたまはず、年ごろの御ありさまを思し出でつつ、などて、つひにはおのづから見なほしたまひてむとのどかに思ひて、なほざりのすさびにつけても、つらしとおぼえられたてまつりけむ、世を経て疎く恥づかしきものに思ひて過ぎはてたまひぬる、など悔しきこと多く思しつづけらるれど、かひなし……。（葵巻③48～49 頁）

a は、急逝した葵の上に蘇生術が施行されている描写であり、つまり招魂儀礼の行われている場面である。葵の上が息絶えてしまったとはいえ、まだ本当の死去の状態ではないという一縷の望みに左大臣家の人々は縋るのである。葵の上の枕をそのままの状態にして移動させず[3)]、様々な蘇生の秘術を施し、２～３日様子を観察したとある。

ｂは、蘇生が失敗した葵の上の遺体が損なわれていく様子を語っている条である。遺体がすでに損壊しているため、左大臣家の人々は、仕方なく、葵の上の遺体を鳥辺野へ運んで行き、葬送を催すことになる。

ｃは、葵の上の葬式の様子について語った叙述である。葬式は夜通し行われ、喧騒の中で盛大な儀式として挙行された。

ｄは、光源氏が葵の上を深く追悼する場面である。光源氏は、葵の上が最期まで自分に対し、よそよそしく気詰まりな夫という認識を抱いたまま死んでしまったことについて残念だと思っている。

ここで、『源氏物語』に描かれてくる葬送に関する先行研究を概観しておきたい。頼富本宏氏は、『源氏物語』の各帖における登場人物の死と葬送に関する記述をベースに、実質的儀礼の経過や手続きを五段階に分け、(1)平癒祈祷、(2)臨終・入棺、(3)葬送・葬儀、(4)追善法事、(5)墓制と整理している[4]。葵の上の葬送に関わる論に限定してみると、林田孝和氏は、全身が腐乱するまで「いきやかへり給ふ」と行われた葵の上の招魂儀礼について、大陸ふうの呪法や加持祈祷・立願など、さまざまな魂呼ばいが行われたと指摘して、招魂儀礼に注目している[5]。また、葬送儀礼の後に展開される追悼の場面については、松本真菜美氏が、親近者により哀悼されるという展開を伝統に則った描写であると説いている[6]。

以上のように、先行研究は凡そ、葵の上の死に際して行われた招魂儀礼や追悼儀礼に注目しながら論じる傾向にあると言える。こういった研究動向に対し、本稿では、招魂儀礼と葬送儀礼の間に描かれている葵の上の遺体損壊の場面（＝ｂ）に注目してみたい。実は、平安期には、女性が死んだ後、なるべく体の清浄さを維持するために遺体を洗浄するという風習があったという[7]。しかし、物語の描く葵の上の遺体は、そのような措置を施されることなく、清浄さを保つことなく崩れてゆくのである。葵の上のような貴婦人の最期を描くにあたって、なぜ物語は遺体損壊というプロセスを敢えて語ってゆくのか。このような問題意識のもとに、『源氏物語』の描く葵の上の葬送儀礼について考察を展開したい。

２　紫の上の葬送儀礼と「極楽往生」

葵の上の遺体について、物語は「かつ損はれたまふことどものあるを見る見るも尽きせず思しまどへど」（葵③47 頁）と語る。本節では、この遺体損壊の叙述をめぐって検討を加えてゆく。まず顧みておきたいのは、この描写に関する林田孝和氏の説明である。

> 葵上は夕霧をやっと出産したあと、除目で人少なになった夜、再び出現した六条御息所の生霊にとり憑かれ絶命する。秋とはいえまだ暑さの残る陰暦八月の中旬、二日三日で死相が顕著となるが、そのまま数日安置。遺骸は傷んでいく。そこなわれていく。大形の魚は舟に引きあげる前、海中で血抜きをし、鮮度を保とうとすることからもわかるとおり、死体は血液の溜まったところから腐敗する。葵上の遺体も腹部や背中から腐蝕が進むはずである。体は白い帷子をまとっているから、見えるのは葵上の顔だけである。その顔が腐蝕し崩れていくと語るのである。作者はまさに葵上の全身腐乱

の状態を描ききる。サディスティック極まりない描写といえよう[8]。

林田氏によれば、葵の上の遺体が腐敗し、醜く崩れていくのは、この場面の時期が残暑である陰暦の８月に設定されているからであるという。暦の上では秋とはいえ、まだ暑さの残るなか、２～３日安置された遺体は、当然のことながら腐乱してゆく。

先に触れたように、平安期には女性の遺体の清浄を重視していた。実際に、『源氏物語』の世界においても、葵の上以外の女性の死については美しく描かれているのである。その中でも、特に注目しておきたいのは紫の上の死である。紫の上という人物は、光源氏の妻妾の１人であり、10 歳の頃に光源氏のもとへ引き取られて以降、光源氏の愛情を一身に受け、43 歳の年に死去する。以下に掲げる場面は、その紫の上の死を描いたものである。

> 御髪のただうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、つゆばかり乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。灯のいと明かきに、御色はいと白く光るやうにて、とかくうち紛らはすことありし現の御もてなしよりも、言ふかひなきさまに何心なくて臥したまへる御ありさまの、飽かぬところなしと言はんもさらなりや。なのめにだにあらず、たぐひなきを見たてまつるに、死に入る魂のやがてこの御骸にとまらなむと思ほゆるも、わりなきことなりや。　（御法④509～510 頁）

紫の上の髪は無造作に投げ出されている。これに勝るものは無いと思われるほど、少しのもつれもなく、つやつやと美しい風情が溢れていると描かれている。灯火が明るいため、紫の上の顔の色は白く光るように見えており、無心に臥している現在の様子の方が、かえって生前よりも素晴らしいのではないかとある。このような完璧な美しい亡骸について、夕霧は「死に入る魂のやがてこの御骸にとまらなむと思ほゆるも、わりなきことなりや」という感想を抱く。すなわち、無理な願いとは言え、紫の上の魂がこのままいつまでも綺麗な亡骸にとどまっていてほしいと思わずにはいられない、というのである。これは光源氏の願いでもあろう。しかし、光源氏はそのような願いに反するかのような行動に出る。蘇生術を紫の上に施さず、彼女の遺体がまだ綺麗なうちに、火葬してしまうのである。

紫の上は８月 14 日に亡くなり、葬送は 15 日の暁に行われた。つまり、紫の上の死では、かつて葵の上の死に際し行われた招魂儀礼や遺体損壊といったプロセスを踏まず、死から直接、葬送というプロセスに入り、しかもそれを１日のうちに施行することになっているのである。この紫の上の葬送の在り方について、先行研究がどのような解釈を加えてきたかを振り返っておこう。鬼束隆昭氏は、歴史上の人物の葬送の事例を参照した上で、紫の上が即日葬られるということは異例であると述べている[9]。河添房江氏は、紫の上をかぐや姫に喩えて、この迅速な葬送により、「紫の上は生前の美しさを微塵も損なうことなく、天女の昇天のような清らかさのまま煙と化していった」と論じた[10]。塚原明弘氏は、紫の上の葬送儀礼におけるこの現象を「即日葬送」と命名し、そこに極楽往生という思想的背景がうかがえることを指摘。この在り方は、光源氏が紫の上の蘇生を自発的に諦め、紫の上の他生への旅立ちを促すための措置であると説いた[11]。頼富本宏氏によれば、平安中期頃から極楽往生の思想が流行するようになったとされており[12]、それを踏まえると、塚原

氏の説には首肯すべき点が認められると言えよう。

果たしてこの『源氏物語』において、塚原氏や頼富氏の説くような極楽往生の思想は実際にうかがえるのであろうか。本稿では試みに、この極楽往生の思想が反映している表現として「後の世」や「蓮」を措定し、その点について検討してみたい。ここでは特に、光源氏と紫の上に関わって表出している事例を取り上げておく。

e. いみじく、わが身さへ限りとおぼゆるをりをりのありしはや」と涙を浮けてのたまへば、みづからもあはれに思して、

（紫の上）消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮の露のかかるばかりを

（源氏）契りおかむこの世ならでも蓮葉に玉ゐる露の心へだつな

（若菜下④245 頁）

f.さるは、わが御心にも、しか思しそめたる筋なれば、かくねむごろに思ひたへるついでにもよほされて同じ道にも入りなんと思せど、人たび家を出でたまひなば、仮にもこの世をかへりみんとは思しおきてず、後の世には、同じ蓮の座をも分けんと契りかはしきこえたまひて、頼みをかけたまふ御仲なれど……　（御法④494 頁）

g. 今は蓮の露も他事に紛るまじく、後の世をと、ひたみちに思し立つことたゆみなし。されど人間きを憚りたまふなん、あぢきなかりける。　（御法④518 頁）

eは、若菜下巻における表出例である。仮死状態に陥るほどの重病にあった紫の上が小康を得て、光源氏と一緒に蓮の花を観賞するという場面。光源氏は紫の上が意識を失っていた間、自分までもが死んでしまうかと思う折々のあったことを告げる。そこで、紫の上は「露」の語を用いながら、自分の命も露のようなはかないものであるという歌を詠む。それを聞いた光源氏は、この世ばかりではなく、あの世においても、「蓮葉」の露のように紫の上とは一蓮託生であると歌を詠み返す。

ｆは、御法巻における表出例である。紫の上は、病を患う中で出家の願望を光源氏に伝えてゆく。しかし、二人が別れることになってしまうその提案を光源氏は受け入れられない。そして、「後の世」では二人で一つの「蓮の座」を分け合おうと約束する。

ｇもまた、御法巻における表出例となる。紫の上に死なれた光源氏は、悲嘆の日々を送っている。今や光源氏は気力を失い、この身を置く俗世に執着も無く、ただ、「後の世」で紫の上と一つの「蓮」に生まれ出たいという強い願いだけを抱いている[13]。つまり、極楽浄土は光源氏にとって、後の世における紫の上との一蓮託生の場所[14]として機能しているのである。

女人の極楽往生は可能か否かという問題[15]については今は措くとして、紫の上が死んだ直後、光源氏が彼女の蘇生に執着せず、速やかに火葬を行うのは、紫の上を一日でも早くあの世へ送り、「蓮の座」に坐らせるためであると解してよかろう。ちなみに、紫の上の葬送の現場について、物語は「野辺の露も隠れたる隈なく」（御法④511 頁）と描いている。この条について新編日本古典文学全集の頭注は、「日射しの中で露のはかなく消え失せる景が、源氏の心象風景でもあるが、それが彼に厭世観を導く」[16]と説く。つまり、紫の上の

死は、光源氏がいままで経験した他の人たちの死とは格段に違い、彼自身の死であるとすら言えるものなのである[17]。光源氏は、紫の上の葬送を即日に行うことで、紫の上を「後の世」に送り出すと同時に、光源氏自身もこの世を厭い離れ、紫の上と共に「後の世」で一蓮託生となることを実現しようと、そう願っているのである。また、「後の世」において、一蓮託生となることを願う以上、自分の慕わしく思う紫の上の姿を生前の通りに維持しておきたいという考慮もあったと思われる。それゆえ、光源氏は積極的に紫の上を「後の世」へ送り出し、なおかつそれを速やかに実行するのである。速やかに実行することの理由は、紫の上の身体や美貌を生前そのままに維持し、損壊させたくないという心情による。つまり、紫の上の死に関わって行われる即日葬送には、夫婦の宿縁を「後の世」まで続けたいという光源氏の深い愛情によると考えられるのである。

3　光源氏の「一蓮託生」の願望

実は、紫の上に限らず、藤壺中宮や女三の宮に対しても、光源氏は「一蓮託生」の思いを抱いている[18]。そもそも、「一蓮託生」や「極楽往生」といった言葉は仏教用語であるため、出家した人はこれらの用語を使ってしかるべき立場にあると言えよう。ちなみに藤壺は、桐壺院の一周忌の直後に出家した（賢木巻）。女三の宮は、柏木との間に儲けた不義の子である薫を出産した直後に、父朱雀院によって得度を受け、出家することになった（柏木巻）。このように、光源氏が藤壺と女三の宮に対して「一蓮託生」の言葉を使うのは、二人の女性がともに出家しているという理由によると考えられよう。こういった事例に対して、前節で見てきた紫の上の事例はどうか。紫の上は、物語を通して出家することはない。彼女は、若菜巻以降、出家の願望を抱くようになり、当初は光源氏にもその旨を告げていくが、ついに許されることはなかった。このような紫の上は、それゆえ出家以外の方法を用いて功徳を積み上げてゆく。すなわち、女三の宮の持仏開眼供養の準備に協力する（鈴虫④373 頁）ことや法華経を供養する（御法④495 頁）ことによって、紫の上は仏教的な功徳を積み上げてゆくのである。つまり、紫の上は出家こそしていないが、仏道修行に励む者という側面を持ち合わせているということになろう。このような紫の上像について、塚原明弘氏は、「『死後の往生』のための『逆修供養』」であると説いている[19]。これは、紫の上が「往生への必要条件」を充たすかどうかについて客観的な視点から考察するものである。これに対して本稿では、光源氏の在り方に注目しておきたい。すなわち、紫の上に対して「一蓮託生」の願いを告げていくという光源氏の在り方である（前節参照）。これは、女三の宮と藤壺という出家した女性たちに対して「一蓮託生」の願いを告げていくのと同じ在り方にほかならない。

光源氏の人生において重要な女性である藤壺、紫の上、女三の宮。この三人の女性は出家したり、仏教修行に励んだりすることによって、極楽往生を達成しようとしている。そして、この三人いずれに対しても「一蓮託生」の願望を抱いてゆく光源氏。この三人のうち、紫の上の葬送だけは光源氏によって営まれることになる。光源氏は、紫の上の極楽浄

土を達成させるために、彼女の葬送を「即日葬送」という迅速な形で施行する。これは、極楽浄土においても、紫の上との夫婦の縁が継続されるに違いないという信念に基づいた在り方であろう。そのような信念を持つがゆえに、光源氏は、例えば葵の上のように、招魂儀礼を施行したり、復活を願って遺体をこの世に長々と放置したりする必要はないと判断したのではあるまいか。ちなみに、葵の上に関しては、出家や、仏道修行に励んでいるといった叙述を物語に見出すことはできない。このように仏教的信仰の文脈に置かれることの無い葵の上は、紫の上の美しい死とは違って、醜い死を物語から付与されることになる。果たして、葵の上が招魂儀礼を施された挙句、ついには醜い死をもって物語に描き出されてくる意味とは何か。次節では、この問題について検討を加えていきたい。

4　葵の上の葬送儀礼に見られる原型

実は、『源氏物語』の登場人物において明確なかたちで蘇生儀礼が施されるのは葵の上のみである[20]。つまり、物語はあえて葵の上の死に蘇生儀礼を設定し、そして、その蘇生儀礼によって招致されることになる死体の損壊を描き出す。果たして、葵の上の醜い死を描き出した物語の論理とは何か。ここで参考になるのが、『古事記』における伊邪那美命の死である。

> 是に、其の妹伊耶那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ往きき。爾くして、殿より戸を縢ぢて出で向へし時に、伊耶那岐命の語りて詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」とのりたまひき。爾くして、伊耶那岐命の答へて白さく、「悔しきかも、速く来ねば、吾は黄泉戸喫を為つ。然れども、愛しき我がなせの命の入り来る坐せる事、恐きが故に、還らむと欲ふ。且く黄泉神と相論はむ。我を視ること莫れ」と、如此白して、其の殿の内に還り入る間、甚久しくして、待つこと難し。故、左の御みづらに刺せる湯津々間櫛の男柱を一箇取り闕きて、一つ火を燭して入り見し時に、うじたかれころろきて、頭には大雷居るり、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には析居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八くさの雷の神、成り居りき。
>
> （上巻、45～49 頁）[21]

夫である伊耶那岐命は、出産で死んだ妻の伊耶那美命に会いたいと思い、黄泉国に赴く。伊耶那岐は、出迎えた伊耶那美に対し、元の世界へ帰ってほしいと語り掛けてゆく。しかし、伊耶那美は、すでに黄泉国のかまどで調理したものを食べてしまったので、帰ることはできないと一度は断ったものの、夫への愛情から翻意し、帰還に同意する。そして、帰還するにあたり、黄泉神と相談しなければならないが、その間は自分の姿を見ないようにと、伊耶那美は伊耶那岐と約束を交わした。相談に長く時間がかかっているため、伊耶那岐は待ちくたびれてしまい、伊耶那美のいる宮殿の中をこっそり覗いた。そうすると、目に入ったのはすっかり腐敗し、蛆にたかられた伊邪那美の身体であった。しかも、頭には多雷がおり、胸には火雷がおり、腹には黒雷がおり、女陰には析雷がおり、左手には若い

雷がおり、右手には土雷がおり、左足には鳴雷がおり、右足には伏雷がおるという状態で、恐ろしく醜い姿に変わっていた。

ここで注意しておきたいのは、伊耶那美が死んだ後、伊耶那岐は黄泉国まで追っていき、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」と発言している点である。本稿ではこの行動を、招魂儀礼の一つである「魂呼ばひ」に相当するものとして捉えておきたい。

中国には、死者を呼び返すという風習が古くから存在している。『礼記』や『周礼』とともに「三礼」と呼ばれる『儀礼』には、「士葬礼」の招魂作法について次のように記されている。招魂を行う復者は、「屋根の棟まで昇ったら、北方に向いて（魂を幽暗の方角に求める）そこで声を長く引いて、『あっ、某（死者の名、婦人ならば字。）復れ。』と呼ぶ。これを三度繰り返してから、復衣を簷の前に下す」と[22]。この記述によれば、招魂の作法において重視されているのは、死者の名前を呼ぶことであることがわかる。『日本書紀』にも、招魂の呪術に関すると考えられる場面が記されている。すなわち、大鷦鷯尊が、死んだ弟の太子の魂を呼び返すという条（巻十一、仁徳天皇、即位前記）である[23]。太子が薨去したという報せを聞いた大鷦鷯尊は驚いて難波から駆けつけ、泣き叫びながら、自分の髪を解いて太子の遺骸に跨り、「我が弟の皇子よ」と呼んだ。すると、太子は即座に生き返り、自分で起き上がった。太子が生き返ったのは、大鷦鷯尊がその名を呼んだからであると解されている[24]。

以上のような招魂の作法を踏まえて伊耶那岐の行動を見直してみれば、伊耶那岐は伊耶那美に対して、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」と発言しており、この名前を呼ぶ作法こそは「魂呼ばひ」という招魂儀礼にほかならないと言えよう。また、ここで『源氏物語』に立ち戻れば、葵の上の招魂儀礼について、本文には「いかめしきことどもを、生きや返りたまふとさまざまに残ることなく」（葵②47頁）とあったことも想起されてくる。すなわち、葵の上に対して招魂の呪術がすべて残すところなく施されたというのである。伊耶那美の死において観察された「魂呼ばひ」という招魂儀礼は、神話・歴史書・物語といった様々な文献の中に継承され、その継承の中に葵の上の死もまた、含まれてくると言えよう。

更にここで注目したいのが、葵の上の死が、出産の直後に設定されているという点である。実は、先に見てきた伊耶那美の死もまた、やはり出産の直後に設定されているという構造的共通性を指摘することができるのである。『古事記』によれば、伊耶那美の死因は、「この子を生みしに因りて、みほとを炙かえて病み伏して在り」[25]とあり、つまり、伊耶那美は火之迦具土神を出産したため、女陰を焼かれて病み伏し、ついに死んでしまったというのである。葵の上と伊耶那美という二人の女性は、死因を同じくしているのである。招魂儀礼の施術後に、生前の姿とはまったく異なる醜い姿へと変貌してしまうという葵の上の事例の先蹤として捉えるべきは、この神話に記された伊耶那美の事例なのだと言えよう。

ここで、死後に醜く変貌した姿を夫に見られた伊邪那美の、その後の運命はどのようなものとなるのかについて確認しておきたい。それは、葵の上の死を考える上で示唆を与えてくれるものとなるはずである。

> 最も後に、其の妹伊耶那美命、身自ら追ひ来つ。爾くして、千引の石を其の黄泉ひら坂に引き塞ぎ、其の石を中に置き、各対き立ちて、事戸を度す時に、伊耶那美命の言ひしく、「愛しき我がなせの命、如此為ば、汝が国の人草を、一日千頭絞り殺さむ」といひき。爾くして、伊耶那岐命の詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、汝然為ば、吾一日に千五百の産屋を立てむ」とのりたまひき。是を以て、一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生るるぞ。故、其の伊耶那美神命を号けて黄泉津大神と謂ふ。亦云はく、其の追ひしきしを以て、道敷大神と号く。亦、其の黄泉坂を塞げる石は、道反之大神と号く。亦、塞がり坐す黄泉戸大神と謂ふ。故、其の所謂る黄泉ひら坂は、今、出雲国の伊賦夜坂と謂ふ。（上巻、49 頁）

伊耶那岐は妻の醜く変容した死体を恐れ、彼女を黄泉国から救い出すのを諦め、元の世界へ逃げ帰ろうとする。夫の逃げる姿に怒った伊耶那美は、直ちに黄泉国の軍団を遣わして、そのあとを追いかけさせた。伊耶那岐はその軍団と戦いながら、逃げ延びて行く。伊耶那美は更に、大勢の黄泉国の軍勢を添えて伊耶那岐を追わせ、最後には、自身までもが追って行った。やがて、伊耶那岐は黄泉国と元の世界との境界、すなわち「黄泉ひら坂」のふもとにたどり着き、大岩を「黄泉ひら坂」の真ん中に置いて道を塞いだ。その岩が、伊耶那美と伊耶那岐とを隔てることになった。

このように、伊耶那岐は黄泉国を訪問し、死んだ伊耶那美を生者の世界に取り戻そうとする。かつて伊耶那岐は、伊耶那美と結婚するにあたって「愛しい我が妻の命よ」という気持ちを表出した。同様の気持ちは伊耶那美が死んだ直後にも見られ、伊耶那岐の「愛しき我がなに妹の命」という「魂呼ばひ」の作法によって表出されてもいた。伊耶那岐のイメージの中では、死んだ妻は生前と変わらないような美しい姿をしていたのであろう。しかし、黄泉国での生活を送り始めていた伊耶那美は、すでに変貌し、醜い姿になってしまったのである。伊耶那美の醜態を見た後、伊耶那岐は伊耶那美を元の世界に連れ帰ることを諦める。二人の訣別は戦いへと発展し、その戦いは伊耶那岐が「黄泉ひら坂」に大岩を置くことで終焉を迎える。これにより、伊耶那美は永遠に地下の世界である黄泉の国に住むこととなり、その世界に統合されることになる。「黄泉ひら坂」は、いわば生者の世界と死者の世界の境界であり、その境界を画定する指標として大岩が用意されたと理解できよう。

ちなみにこの神話は、歴史書である『日本書紀』にも記されている[26)]。『日本書紀』では、伊耶那岐命は「伊奘諾尊」、伊邪那美命は「伊奘冉尊」と表記されることになる。細部には多少の違いがあるが、伊奘冉尊が出産で死去し、黄泉の国の住人となり、夫の伊奘諾尊が迎えに行き、妻の変貌した姿を見て逃げ帰り、その途中で大岩を用いて黄泉の国との間に境界を画定し、妻を黄泉の国に閉鎖するまでの経緯は、『古事記』に記されている話と

殆ど同じである。但し、『日本書紀』では最後に、「遂に絶妻之誓を建したまふ」という一言が付け加えられている。つまり、伊奘冉（＝伊邪那美）は伊奘諾（＝伊耶那岐）によって黄泉の国に封印された後に、更には、離縁の誓言を言い渡されたことになる[27]。

さて、ここで『古事記』や『日本書紀』に見られた伊邪那美の死ぬ前後のプロセスを整理してみたい。

① 出産、②死、③招魂儀礼、④遺体損壊、⑤境界設定

この①から⑤までのプロセスのうち、④の遺体損壊と、⑤の境界設定は、この神話に固有のプロセスとも言える。それを踏まえて、再度、『源氏物語』に描かれた葵の上の死を想起してみよう。そこでは、①出産、②死、③招魂儀礼、④遺体損壊といったプロセスが描かれていたことを確認することができる。これらは、伊邪那美の死における①から④までのプロセスと一致している。『源氏物語』が、葵の上の死を描くにあたって、あえて④の遺体損壊というプロセスを組み込んでいることの説明として、この神話のプロセスは有効な示唆を与えてくれると言えよう。そういった仮説に基づいたとき、神話のプロセスの⑤として置かれている境界設定についても、それを葵の上の死を描く文脈の中から見出すことができるのではないか。

そもそも光源氏と葵の上との結婚は、左大臣と桐壺帝の政治的思惑と深く関わるものであるため[28]、光源氏にとって葵の上は、自らの恋愛衝動が求める女性とは言えない。実際に、光源氏は葵の上と対面するとき、葵の上を容貌、姿勢などの「外面的」な点については高く評価するが、一方で「内面的」な点に対しては関心を持たず、何ら言及していないという指摘がある[29]。葵の上の生前、光源氏が左大臣邸を訪問するのも、彼女の北の方としての立場を蔑ろにするわけにはいかないという配慮に基づいているからである。それゆえ、葵の上の死後、光源氏は自然と葵の上が暮らしていた左大臣邸を去っていくことになる。葵の上の四十九日の法会を終え、左大臣邸を退出し、自邸である二条院へ帰ってきた際の光源氏の目に映ったのは、左大臣邸とは異なり、一転して明るい舞台であった。以下に掲げるのは、その時の二条院の風景である。

> 二条院には、方々払ひ磨きて、男、女待ちきこえたり。上臈どもみな参上りて、我も我もと装束き化粧じたるを見るにつけても、かのゐ並み屈じたりつる気色どもぞあはれに思ひ出でられたまふ。御装束奉りかへて西の対に渡りたまへり。更衣の御しつらひ曇りなくあざやかに見えて、よき若人、童べのなり、姿めやすくととのへて、少納言がもてなし心もとなきところなう心にくしと見たまふ。　（葵②68 頁）

二条院では、どの部屋もが拭き清められ、女房たちが互いに競って着飾っていた。紫の上の居住する西の対の部屋は鮮やかに飾り付けられ、女童の姿も見苦しくないように整えられている。このように彩られた自邸を見て、光源氏は、暗い雰囲気に沈んでいた左大臣邸の様子を思い出す。あるいは光源氏の目には、眼前の美しい女房や女童とは対照的な葵の上の損壊した遺体が映っていたかもしれない。しかし、今や光源氏はすでにその損壊した遺体の記憶と共にある左大臣邸から退出し、二条院へと帰って来ているのである。ここ

は、光源氏の本拠地であり、かれの人生の基点でもある[30]。つまり、光源氏が今回二条院へ帰ってきたことは、彼が自分の本来の世界へと回帰したことを意味するのである。二条院へ回帰した光源氏は、間もなく紫の上と新枕を交すことになる。この新枕により、光源氏と紫の上は夫婦の関係へと移行する。それはまた、葵の上との夫婦関係の終焉をも意味しよう。ここにおいて、光源氏と葵の上との夫婦の縁が完全に断ち切られることになる。神話における⑤の境界設定が、『日本書紀』では、「離縁」の契機として機能していたことをここで想起したい。葵の上の死の描写が神話的プロセスを踏襲していることの意味をここに見出しておくこととする。

5　結論

「絵に描きたる姫君」（若紫①300 頁）として造型されている葵の上は、死んだ後、招魂儀礼が行われることになる。しかし、復活再生は成就せず、そのまま葵の上の遺体が損壊していく様子を物語は提示していく。そのような描かれ方は、物語内や歴史文献などに記された他の女性の死を顧みたとき、かなり特殊な事例であると考えられる。物語が、葵の上の死と対照的に描き出すのは紫の上の死である。紫の上が美しい死を付与されるのは、彼女を極楽浄土へ送り出し、「一蓮託生」を願う光源氏の意図に基づいているからである。光源氏の最愛の女性の葬送には、彼の深い愛情が組み込まれていると読み取れるのに対して、正妻である葵の上の葬送には、招魂儀礼によって招致されてしまう醜い死があり、そこには、紫の上の死とは対照的な意味が読み取れると考えられる。この、葵の上における醜い死の意味を考察するにあたって、本稿で参考としたのが、『古事記』や『日本書紀』に記された伊耶那美命の死である。

伊耶那美は、新しい国を作る使命のもとに伊耶那岐と結婚するが、やがて出産により死んでしまう。その際、夫によって「魂呼ばひ」という蘇生儀礼が施されるが、自分の醜い姿を夫に見られたことで、結局は夫に逃げられ、黄泉の国に封印されることになる。物語の描く葵の上の死は、この伊耶那美の死と同じ構造を持つと考えられる。すなわち、出産を契機として死去してしまった葵の上は、伊耶那美と同じように蘇生儀礼が施され、しかしその甲斐も無く、遺体は損壊していく。そして、葵の上の死後、光源氏は辛い記憶の残る左大臣邸を去り、自分の本拠地である二条院へと帰還し、紫の上との結婚という運びとなる。この結婚をもって、葵の上は光源氏の世界から完全に離脱することになる。つまり、この紫の上との結婚に至る一連のプロセスは、伊耶那岐が元の世界へと帰還する過程で「黄泉ひら坂」に大岩を置き、境界を画定することで伊耶那美を黄泉の国に封印し、「離縁」を誓言するというプロセスと同じ構造にあると言えるのである。葬送儀礼に醜い死が挿話として組み込まれていることの意味は、生者と死者の間に境界を画定することにあると考えられよう。醜い姿は、もはや当人が別の世界の住人になったことを象徴するものとして機能しているのである。一方、その醜い姿を見るということは、死者が再び元の世界に戻ってこないでほしいという生者側の心境を生成する契機になっていると言えよう。

［注］

[1] 青木慎一・長谷川範彰・馬場淳子（「『源氏物語』通過儀礼一覧」小嶋菜温子・長谷川範彰編　『源氏物語と通過儀礼』武蔵野書院、2012 年）による。
[2] 『源氏物語』の本文の引用は新編日本古典文学全集（小学館）により、巻名・冊数・頁数を記した。傍線等は引用者による。
[3] 新編日本古典文学全集の頭注一四によれば、「仮死状態になった人を、北枕西向きに位置を変える『枕がえし』をすると、その人は蘇生できないと考えられていた」（葵巻②46 頁）という。
[4] 頼富本宏「源氏物語の葬送―とくに仏教儀礼の立場から―」（小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』竹林舎、2007 年）
[5] 林田孝和「源氏物語の葬列―「車より落ちぬべう惑ひ給へば」を焦点に―」（『源氏物語の精神史研究』桜楓社、1993 年）
[6] 松本真菜美「葬送儀礼関係歌の流れから見る『源氏物語』」（小嶋菜温子・長谷川典彰編『源氏物語と儀礼』武蔵野書院、2012 年）
[7] 中村義雄『王朝の風俗と文学』（塙書房、1962 年）「葬送」の項によれば、「入棺に先だって沐浴の事が行われる」という。また、山中裕・鈴木一雄編集『平安時代の儀礼と歳事』（至文堂、1991 年）「葬送・服喪」の項（河添房江執筆）によれば、「死が確認されると、死者としての扱いをする。必要がある場合には、近親者や僧の手により、まずは沐浴をさせる」という。
[8] 林田孝和「源氏物語の葬列」（『源氏物語の精神史研究』桜楓社、1993 年）
[9] 鬼束隆昭「源氏物語における死・葬送・服喪の表現」（源氏物語探求会編『源氏物語の探求　第七輯』1982 年８月）
[10] 河添房江「源氏物語の内なる竹取物語――御法・幻を起点として――」（『源氏物語の喩と王権』有精堂出版、1992 年）
[11] 塚原明弘「紫の上の死と葬送の表現」（『中古文学』第 53 号、1994 年 5 月）
[12] 頼富本宏、前掲注 4 論文。
[13] 新編日本古典文学全集の頭注七によれば、「極楽浄土では、夫婦は後から来る伴侶のため蓮花の座の半分をあけて待つ」（前掲注 2 書、朝顔②496 頁）という。
[14] 『河海抄』は、「よしのちの世にたにかの花のなかのやとりにへたてなくおもほせとて、一々池中花尽満花々惣是往生人各留半座乗花葉待我五会讃」（玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』507 頁、角川書店）と注する。
[15] 塚原明弘、前掲注 11 論文には、女人往生の可能性と確証を論じた。
[16] 新編日本古典文学全集、頭注二一（前掲注 2 書、御法④511 頁）による。
[17] 永井和子「紫の上における死の様式」（『源氏物語と老い』笠間書房、1995 年）
[18] 藤壺中宮や女三の宮に対する光源氏の「一蓮託生」の願望も、「後の世」や「蓮」という語によって表現されている。
[19] 塚原明弘、前掲注 11 論文。
[20] 但し、林田孝和「源氏物語における死後の描写―ともし火をかかげつくして―」（『源氏物語の発想』桜楓社、1980 年」）においては、「灯火を挑げ尽くして起きおはします」（桐壺巻①36 頁）の灯火は、亡き桐壺更衣の霊を呼ぶ火、つまり、招魂の迎え火であると説いている。
[21] 新編日本古典文学全集『古事記』（小学館、1997 年）
[22] 彭林『儀礼』403 頁（中華書局、2012 年）、藤野岩友『増補巫系文学論』211～212 頁（大学書房、1969 年）
[23] 新編日本古典文学全集『日本書紀』②（小学館、1996 年）
[24] 林田孝和、前掲注 5 論文。
[25] 前掲注 21 書、41 頁。
[26] 『日本書紀』巻第一・神代上〔第五段〕一書第六（新編日本古典文学全集『日本書紀』①、小学館、1994 年、45～47 頁）
[27] 新編日本古典文学全集の頭注五には、「絶妻之誓」について「離縁の意」とある（前掲注 26 書、46 頁）。
[28] 葵の上を政治性という視点から考察する論としては、室伏信助「葵の上」（『国文学』学燈社、1991 年・５）、吉井美祢子「葵の上の「政治性」とその意義」（森一郎編著『源氏物語作中人物論集―付・源氏物語作中人物論・主要論文目録―』勉強社、1993 年）、吉海直人「左大臣の暗躍――『源氏物語』の再検討」（『日本文学』1996 年第 45 巻第 9 号）、和田由紀子「葵上の登場――『源氏物語』構造論の一環と

して――」（『成蹊国文』第 35 号、2002 年）など。
[29] 猿渡学「「とはぬはつらきものにやあらむ」―葵上試論―」（『文芸研究』第 135 集、1994 年 1 月）
[30] 福田将士「源氏物語の〈死〉の儀礼―葵上＝紫上の図式―」（『国際文化研究紀要　第 4 号』1998 年）

［参考文献］

小嶋菜温子・長谷川範彰編、2012 年、『源氏物語と通過儀礼』、武蔵野書院
阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男、1994～98 年、新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥、小学館
山口佳紀・神野志隆光、1997 年、新編日本古典文学全集『古事記』、小学館
小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守、1994～98 年、新編日本古典文学全集『日本書紀』①～③、小学館
小嶋菜温子編、2007 年、『王朝文学と通過儀礼』、竹林舎
林田孝和、1993 年、『源氏物語の精神史研究』、桜楓社
中村義雄、1962 年、『王朝の風俗と文学』、塙書房
源氏物語探求会編、1982 年、『源氏物語の探求　第七輯』、風間書房
河添房江、1992 年、『源氏物語の喩と王権』、有精堂出版
永井和子、1995 年、『源氏物語と老い』、笠間書房
林田孝和、1980 年、『源氏物語の発想』、桜楓社
彭林、2012 年、『儀礼』、中華書局
藤野岩友、1969 年、『増補巫系文学論』、大学書房
森一郎編著、1993 年、『源氏物語作中人物論集―付・源氏物語作中人物論・主要論文目録―』、勉強社

付記

本稿は、2015 年に、山口大学大学院東アジア研究科に提出した博士学位論文、「『源氏物語』の人生儀礼に関する研究」の一部を加筆修正したものである。

所属：四川外国語大学日本語学部
E-mail アドレス：zhaoxiaoyan711＠163.com